

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
January 2026

No.50

【特集】LIFE：まもる／守る／護る
働き／働く

創刊から通算50号目を迎えた今号。特集のテーマは「働く」。この社会に生きるわたしたちは「働き」から何を得て、何をまもるべきなのか。働くことの多様性と個人の生き方の問題を考えます。



JOINT

January 2026
No.50



Photo by Yoko Niide

今号の表紙は午年にちなみ、助成対象者の方からフィリピンのお土産としていただいた馬の置物です。これはラグナ州パエテ町発祥の伝統的な紙粘土(張り子)工芸「TAKA」というもので、地域の住民、特にこの民俗芸術に専門に携わる女性たちにとって重要な暮らしの糧となっているそうです。本作品のテーマは「パエテ町における家族の集い」とのことです。

CONTENTS

FIRST WORD ◎ 犬塚 力
新年のご挨拶 2

【特集】LIFE: まもる/守る/護る 働き/働く

助成対象者鼎談 辻岡秀夫 × 中野祥子 × 野村 駿
ワークとライフのバランスをどうとるか 4

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿
国際助成プログラム ◎ 東 恵子
日韓のダブルケア支援プロジェクトを通して 12

研究助成プログラム ◎ 下向依梨
ウェルビーイングな学校と地域を育むために 14

国内助成プログラム ◎ 築瀬健二、尼野千絵、尼野三絵、馬崎 慧
人と人の新たな繋がりが、これから自治を支えていく 16

中間報告会・合同ワークショップ・レポート ◎ 寺田 俊
共有から育まれる未来 18

ワークショップ・レポート ◎ 寺崎陽子
想像力で未来をひらく 20

「私」のまなざし ④ 宮原克典
身体性から見る人間とAIの相違点 22

トヨタ財団ジャーナル
カイケツ Next【入門編】in 北海道 ほか 24

公益財団法人 トヨタ財団会長
犬塚 力 (いぬづか・りき)

この度、小平信因前会長の後を受けて、トヨタ財団会長に就任いたしました犬塚力です。1974年に設立された当財団が設立50周年を迎える、次の50年間に向けて歩みを始める、まさにその年に就任したことを光榮に存じます。皆さまには平素よりトヨタ財団へ多大なるご支援、ご指導を賜り、厚く御礼申し上げます。

私は1982年にトヨタ自動車に入社した後、北米での勤務を経み、商品企画や人事、経営企画等の分野を経験してきました。2015年からはトヨタファイナンシャルサービス、2019年からは中部国際空港の社長をそれぞれ務めてまいりました。現在はトヨタ財団に加え、名古屋フィルハーモニー交響楽団の理事長も兼務しています。また、2019年にはNPO法人「SCCIフォーラム (Sustainable Co-Innovation Forum)」を立ち上げ、その代表理事も務めています。このように営利企業と非営利団体の双方でキャリアを積む中で、両者の違いを超えて共通する重要な点に気づかされました。

一つ目は、「組織は何のために存在するか」という点です。トヨタでの経験を通じ、私は「企業の最大使命は社会課題の解決」であると学びました。トヨタの歴史を振り返ってみれば、自動織機の発明、日本における自動車産業の立ち上げ、環境に優しいハイブリッドカーやFCVの発売と普及など、正に課題解決の歴史そのものです。もちろん営利企業である以上、利益の獲得は不可欠ですが、社会課題に正面から向き合い、組織一丸となって解決に尽力し、その結果として利益を得るという順番を間違えてはなりません。この点は、営利企業も財団やNPO等の非営利団体も、目指すべき本質は共通しています。

二つ目は、組織を動かし、社会を動かすには「高い志と情熱」が欠かせないという点です。トヨタ在籍時、私は孤独死や不登校、若者支援、途上国支援、地場産業の活性化といった課題に献身的に取り組む方々を多く知ることができました。その志と情熱には、心が震えるほど感動しました。今後さらに求められるのは、同じ志を持つ営利企業と非営利団体が手を取り合い、共通の課題解決に取り組むことだと思います。更には行政を巻き込んでいくことも欠かせません。こうした協働・共創こそが、社会全体にインパクトを与え、より良い方向へ動かしていくと信じています。

近年の世界情勢を見れば、変化の激しさと速度には驚かざるを得ません。デジタル化や生成AIの進化、人口動態や国際環境の変化、気候変動、更にはコロナのような世界的な感染症の拡大などから生まれてきた新たなエネルギーに対し、これまでの社会構造が應えきれなくなっているのは明らかです。次なる社会の骨格がどうあるべきか、さまざまな議論がありますが、トヨタ財団としても助成活動を通じて、新たな社会作りの鍵となる成果や好事例を創出し、発信したいと考えます。そのためにも、社会課題解決のための高い志と情熱を持った多くの人たちが、さらに積極的に当財団へ応募してくる、そして助成を受けるという流れを加速させていきたいものです。

トヨタ財団の次の50年への歩みに対し、皆さまの厳しくも温かなご指導、ご鞭撻をいただければ幸いです。



ワークとライフのバランスをどうとるか

Tsujioka Hideo

Nakano Sachiko

Nomura Hayao

辻岡秀夫 × 中野祥子 × 野村駿

ファシリテーター ◎ 武藤良太(プログラムオフィサー)

三者三様の立場と活動

野村 秋田大学の野村です。プロジェクトメンバーは、学校や企業で調査をしてきた4名の研究者に加えて、実務家教員(元教員)3名にも入っていただき、学校を一つの組織として見たときに、それぞれの学校の働き方、先生方の働き方がどう違うのかといったところに重点を置いて一緒に調査をしています。教師の多忙問題にどう切り込めるかという点に関心があります。

しかし、僕は教師の研究を長年やつてきたわけではありません。もともとは「夢追いバンドマン」の研究をしていました。普段やっているのはライブハウスなどに行って、「俺は音楽で生きてくんだ!」と言っている若者に、なぜそう思うようになったの?ということを聞いたり、彼らがその後どうなつていくのかを追跡調査したりしてきました(野村駿、2023『夢と生きる バンドマンの社会学』岩波書店)。

教師の研究をやり始めたのは、大学院生のときに中学校の先生の働き方の問題に共同研究で関わらせていただいたのがきっかけでした(内田良・上地香杜・加藤一晃・野村駿・太田知彩、2018『調査報告学校の部活動と働き方改革――教師の意識と実態から考える』岩波ブックレット)。なので、もともと若者の働き方、いわゆるサラリーマンのような雇用労働者ではない選択をした人たちがどういうライフコースを歩んでいくのかという研

2025年度のJOINTの通年テーマは「LIFE: まもる/守る/護る」です。この言葉には、弱い立場にある人を支えたり、これまで持っていたものが失われたりしないようにするだけでなく、多様な人や社会が力を発揮できる環境をまもり、望む未来を創っていくという積極的な意味も込められています。

第3回は、「働き/働く」に着眼し、それぞれに異なる立場や視点から取り組みを進められている3名の助成対象者の方にお集まりいただき、助成対象となったプロジェクトに限らず、ご自身のキャリアやライフステージなどの問題意識や思いも含めて率直に語り合っていただきました。

2025年は「ワーク・ライフ・バランス」という言葉に改めて注目や関心が集まりましたが、期せずして、今回の鼎談でもこの言葉に触れる場面がありました。「働き」や「働く」は非常に広範でさまざまなものが含まれてくるからこそ、何か一つの正解を求めたり特定の姿に縛られたりするのではなく、「働くこと」に対する一人ひとりの価値観や在り方が尊重された上で、「働き方」などの社会の仕組みもより熟度が増していくことの大しさも皆さんのお話から多分に窺えました。

今回の鼎談は、結果として過去2回と比較して今年度の通年テーマへの直接的な言及は薄まりましたが、多様な問いかけや示唆を含む内容となっています。是非ご一読ください。

【特集】

LIFE

まもる/守る/護る

働き/働く





●野村駿 (のむら・はやお)

秋田大学 教職課程・キャリア支援センター講師。2023年度 イニシアティブプログラム「学校現場とともに進める働き方改革に関する実践的・実証的研究」代表者

究をずっとやつていく中で、それを教師の働き方の話に置き換えて、働きすぎという問題が何によって起因するのか、何によって変化するのかということを明らかにして、それを現場に還元していきたいと考えています。これまでやつてきたことと現在していることは異なりますが、「働き方」に関心があるという点では共通しています。

中野 私の専門は異文化間心理学で、博士号は文化科学です。現在は山口大学の留学生センターというところで講師をしており、留学生に対して日本語教育をしています。また、最近新しい大学院ができまして、その修士課程で異文化間心理学を教えています。

トヨタ財団の助成で行つた調査から、若者が提供できることと地域が解決したいと思つてゐる課題が合致していることがわかりました。また、活動を行うにあたつて依頼主とのコミュニケーションの部分に不安がある若者が多いということもわかつたので、両課題が解決、カバーできるような形でこのプロジェクトを始めました。

このプロジェクトはワークを体験したひきこもりの若者が自分も社会に出られるかも知れないと思い挑戦する後押しになりますし、もし難しくて戻つても自分のペースで再挑戦できるようなフォローの仕組みを考えて実施しています。

ここに相談に来られる方々は職場や学校に所属してない、でもコンビニには行けたり、趣味の集まりのサークル活動には入つてゐるというような人から、もう何年も自分の部屋から出られない方もいらっしゃるので、状態の幅は広いといえます。以前はいじめなどがきっかけで不登校になつて学校に行けなくなったり、そのまま家に留まり続ける人が多かつた

ここに相談に来られる方々は職場や学校に

所属してない、でもコンビニには行けたり、

趣味の集まりのサークル活動には入つてゐる

というような人から、もう何年も自分の部屋

から出られない方もいらっしゃるので、状態

の幅は広いといえます。以前はいじめなどが

きっかけで不登校になつて学校に行けなくな

り、そのまま家に留まり続ける人が多かつた

研究や社会活動としては、外国人の日本語教育、日本人に向けてのやさしい日本語の指導、それから外国人介護職の人たちに向けた方言研修をしています。インドネシアやフィリピンの技能実習生が介護職についているケースが多いのですが、山口は山口弁が結構きた実習生たちでも、実際は全然言葉が通じなくて心が折れてしまうことがよくあるので、それをどうにかしたいたいと考えています。お年寄りの音声を録音して、その言葉を教えて、実際に対面して話すという、対面を介した異世代間交流かつ異文化間交流プラス日本語教育をしています。方言を使いこなせるようになることが目標ではなくて、まずはお年寄りを怖がらないとか、方言があるけれどもなんとか会話になつたといった成功体験を積み上げてもらつて、居場所を作ることを目標にしたプログラムを動かしています。それから日本にいた留学生や技能実習生たちが母国に帰つた後に日本語の能力を維持するお手伝いもしています。

外国人材と一緒にでも、いわゆるホワイトカラーの人たちと、特定技能や技能実習生の方たちとは思考が全然違つています。前者は残業はしたくないと思つてますが、基本的に技能実習の皆さんは収入のために残業して働きたいんですよ。残業がない会社は収入につながらないので人気がなく、そのような会社は「ホワイト」だからというのが転職の理由になります。韓国は日本に比べると残業し放題の企業が多いので、人材が韓国に流れています。そこで、「働く」といった視点が違うんだなというのは、この研究を始めてから衝撃を受けたことの一つです。

助成プロジェクトでは、在日外国人のための異文化間防災研修プログラムを作成しま

す。外国人雇用企業への防災BCPの構築と実践ということなのですが、BCPとは災害

や事故、パンデミックなどの緊急事態が発生したときに、企業が事業を中断するよ

ういうのが主な目的です。近い将来大きな地

震、特に首都直下と南海トラフが発生する

とき

に

言われています。外国人材は中小企業にとつてはもう欠かせない戦力となつてお

り、製造業では外国人材が3割を占めています。す

べ、日本の遠い地域で地震が起つただけで

関係ない県の労働者が帰国してしま

うことがあります。そのようにして帰国し

てしまつたり、あるいは災害が発生したとき

に情報がなく逃げ遅れて亡くなつてしま



●辻岡秀夫 (つじおか・ひでお)

NPO法人「ゆどうふ」理事長。一般社団法人JYCフォーラム理事。臨床心理士。2021年度 国内助成プログラム「多様な若者が生き活きと社会参加できるまちづくり ー『わらしべワークプロジェクト』」代表者

の理由になります。韓国は日本に比べると残業放題の企業が多いので、人材が韓国に流れています。そこで、「働く」といった視点が違うんだなというのは、この研究を始めてから衝撃を受けたことの一つです。

助成プロジェクトでは、在日外国人のため

の異文化間防災研修プログラムを作成しま

す。外国人雇用企業への防災BCPの構築と実践ということなのですが、BCPとは災害

や事故、パンデミックなどの緊急事態が発生したときに、企業が事業を中断するよう

ういうのが主な目的です。近い将来大きな地

震、特に首都直下と南海トラフが発生する

とき

に

言われています。外国人材は中小企業にとつてはもう欠かせない戦力となつてお

り、製造業では外国人材が3割を占めています。す

べ、日本の遠い地域で地震が起つただけで

関係ない県の労働者が帰国してしま

うことがあります。そのようにして帰国し

てしまつたり、あるいは災害が発生したとき

に情報がなく逃げ遅れて亡くなつてしま

うことがあります。そのようにして帰国

野村 僕は、こちらの助成プロジェクトやバ
ンドマンの研究とは別に、地域に残つて暮ら
す若者に関する共同研究にもメンバーで入ら
せてもらつていて（日本学術振興会科学研究
費助成事業 基盤研究（B）「産業構造の変容
がトランジッショングに与える影響の地域
差」、研究代表・知念涉）、そこで最近関心が
あるのは、仕事に自己実現を結びつける見方
があまりにも肥大化しすぎているのではないか
かという点です。仕事に自己実現を求めるバ
ンドマンの研究をしたり、教師でも仕事＝や
りがいという見方ができるのですが、決して
そういう人ばかりではないだろうと。
そうなつたときに、働くことをどう価値付
けるかという��は大きなポイントになると思
いました。働く＝自己実現であり、やりがい
とされている世界とは違う「働くこと」をど
う社会が認めていくか、どう位置づけている
のかはとても気になります。たぶん現実には

加えて、経営者の方々が社員の意欲向上のために「この仕事には社会的意義がある」「みんなが頑張れば多くの人の役に立つ」といったメッセージを伝える場面は少なくありません。一方で、現場では給与が低く生活が厳しく中で働いている人もいて、「みんなのためだから頑張ろう」と励まされることで、負担を抱えながら努力を続けてしまい、いわゆる「やりがい搾取」のように感じられる場合もあります。やりがいを強調されると、なかなか断りづらい面もあります。だつて本来はいいことなのに断つたら悪い人みたいですからね。仕事は仕事なんだという枠組みのなかで、自分がどれくらい熱を入れるか、それが伝

き」という言葉が並列していて、「働き」の方は「働き方」みたいな仕組みがあつて、その上に個人の「働く」ということに対する向き合い方や心の部分も乗つてくるのかなと思うのですが、皆さんのがプロジェクトを通じてやらされているのは、働き方の仕組みや社会参加、コミュニケーションのところですよね。働き方の仕組みの話と「働く」を分けた時に、社会の構造的な部分ともう少し個人にかかわる部分があるかと思うのですが、それがどんなバランスになつていつたらいいか、もしくは日本社会はこういうところが足りていないといつたようなことはありますか。

辻岡 いるので、こういうふうに見ているんだなど
氣づくポイントはたくさんあります。それで
もやはり一面的に見てしまっているところも
あるだろうし、むしろそういう見え方をどう
社会に伝えていくか、辻岡さんが最初にこの
事業を起こされたときに、地域の人はどう説
明していくのか。たぶん地域の人ともその
見え方の違いのところで何か衝突があつたり
とか、それが生じたようなことはなかつたか
うかがつてみたいですね。

辻岡 初めのうちは、ひきこもりの人人がこう

A medium shot of a woman with short, dark brown hair styled in a side part. She has a gentle expression, looking slightly to her right. She is wearing a light-colored, possibly white, V-neck top. The background consists of a window with a grid frame, suggesting an indoor setting like a home or office. The lighting is soft and natural.

● 中野祥子(なかの・さちこ)

山口大学教育・学生支援機構 留学生センター 講師。2023年度 特定課題
外国人材の受け入れと日本社会「外国人雇用企業への防災 BCP の構築と
実践：「わかる」から「できる」に移行する異文化間心理教育を用いた防災
プランと研修開発」代表者

いう地域活動をやるのって大丈夫なの？という声は少なくなかったです。メディアでひきこもりの人が問題を起こしたというようなニュースがたくさん流れるので、バイアスがかかっていたんですね。そういう雰囲気があつたなかで町内会でみんなで草むしりをすることがあつたときに、ひきこもりの若者と一緒に行つたのですが、しばらくしてから町内会の人から「で、ひきこもりの人つていつ来るんだ？」と言われて、もう一緒にやつていますよ。想像とは違つて普通の若者が来たので気づかなかつたということですが、こうやって社会的認知を変えていく必要

今思うと教師は何時間でも学生のことを考えるのが当たり前な職業だと思つていたといふことなのですが、それで誰からも怒られない、迷惑ではないと思つていたからそれを選んだというところがあります。なので、教員は一定数そういう仕事だと思われてゐるのも事実ですし、そういう人が選択して働いてゐるであろうところも理解ができるなど思います。

好きでやつている人に対してもうするかと
いうと、仕組み作りとして自由な選択肢が取
れるように整備していくべきだと常に考えて
います。そのうえで自分の範囲のなかでやり
たい人はやつて、それを周りがとやかく言わ
ないような環境を整備するのも大事だと思ひ

いなと思っています。

中野 好きで働いている人にどうアプローチするかというのはすごく共感するところがあります。私自身も職種を決める際、自分はおつちよこちよいミスが多いタイプなので、たとえば病院や一般企業などで働いたらすごく時間がかかってしまったり、ミスをして大変なことになりそうと思ったときに、人の話を聞いたり、人のために時間を使うことが全然苦ではなくて、そういうことが好きかもしけんなないと気づき、それが生かせるのは教育がない

からお米や飲食店のサービス券をもらえるけど、日本人のスタッフはもらえない。でも日本では、職場の外国人のスタッフだけ生活の足しにとご厚意で会社があります。仕事には常に人間関係がつきものです。

あるけれど、表舞台では語られていないような印象があります。

中野 どちらの気持ちもわかります。私は中小企業で働いている従業員の方のカウンセリングをやっていて、自己実現型の方たちは、自分が先輩になったときには後輩にコーチングのような方法で指導していくこうと思つている傾向が強いです。そういう方々は「後輩には自分がどうなりたいのかをまず設定させるところからやつていいこうと思うんですよ」と言います。でもそういうときに思うのは、なりたい自分が仕事のなかで表現できない人だつているということです。そういう人も無理にその目標と計画を作らされて、そこに向かつていかないといけない辛さは絶対にあるので、そういう人だつているということをまずは認めてください、と言わないといけない場面があります。

わつたらラッキーですが、伝わらなくても、なんだこいつはとは思わないこと。その冷静さが絶対に必要だということを伝えています。従業員に自分の志を共有するのはいいですが、押し付けてはいけません。ワークライフバランスは自分で決められるようにしたいというのが私の理想です。ライフの方を充実させようよと強要されても困るし、仕事を自分の成長につなげようと強要されるのも困ります。自分のことは自分で決められる社会になるといいなと思います。

私たちの支援現場でも、どんなふうになつていきたいのか、その結果どう自己実現したいのかを本人に聞きます。いきなり一番の難問を投げかけているなと思いますが、仕事を就くことよりも、続けていくことのほうが絶対難しいと思つてるので、始めはどうなりたいということを描きつつ、仕事を続けるなかで思い通りにいかない現実との折り合いをつけていくことで、自分のあり方を現実に落とし込むことができるといいのかなと思つています。

その過程がないと、自己実現した自分の理想に対し、逆算して自分の人生に足りない

いものだけを考えるようになってしまいま
す。それは結局本人にとつても空虚感があり
ますし、そのようなマインドでいれば、社会
は彼(女)らにとつてあまり魅力的に映らない
だろうという気がしている。だから自分が描
いたものを一歩ずつ現実に落とし込むような
形が仕組み化するといいなど強く感じている
ところです。

働き方の多様性と選択の自由



中野

選択という点でいくと、ワークとライ
フがそんなにはつきり分かれるのかというの
はすごく大事なポイントだと思います。働き
方、働くことに対する向き合い方の選択可能
性をどれくらい担保するかといったような話
だと思いますが、今つてそんなに選べてい
ますか？まず選べるという前提自体が少し
偏っている感じもしています。

最近、戸惑う出来事がありました。私が立ち
上げて担当していた業務が、私がその役割
から離れた後、十分に引き継がれず、運営の
形が大きく変わってしまったのです。その際、
「あなたはワークライフの一部として取り組
んでいたから実現できたことだけれど、他の
人には同じようにはできない」といった趣旨
のことを言わされました。しかし、私がやつて
いることは全部仕事です。仕事をただ本当に
一生懸命やっているというだけです。

仕事は自分の時間を使っているのであつ
て、適当に時間を使いたくないから一生懸命
やるもの当たり前で、時間を使うなら人の役
だけではなくてみんなに共通することである
べきだと思います。

——それでは最後に一言ずつお願いします。

中野　　お二人からたくさん刺激をいただきま
した。辻岡さんのお話からは、人によつて働
くことはハードルが高いけど、まず目の前の前
ことを続けて頑張ろうと思えたのがすごく励
みになりました。それつてひきこもりの支援
だけではなくてみんなに共通することである
べきだと思います。

*

——息苦しくしている原因かもしません。新

しい別の言葉が欲しいですね。

野村　　野村先生のご研究はアンケートやインタ
ビューに協力してくださる皆さんの協力感が
すごく、社会から求められている研究だな
と感じたので、今後結果を追わせていただき
ます。

野村　　辻岡さんのプロジェクトは事業 자체に
すごく興味が湧きました。できると思つて社
会に出る、でも挫折して戻ってきてまた社会
に出る、そのように行きつ戻りつしながら少
しづつ進んでいけるというところが特に興味
深かったです。教師になろうと思つている学
生たちは絶対に知つておいてほしいところ
です。

野村　　それから働くことのハードルの話はすごく
大事だなと思つていました。これは教師では
なくてバンドマンの方ですが、ワークとライ
フ、バンドってどつち？という話をよくす
るんですよ。まだワークにはなつていなければ
ど、ライフかというと、「いや、俺のは趣味じや
ない」となつて位置づけできません。そ
うい
うところでモヤモヤしていひたので、もう少し
レンジを広げて、さまざまな働き方を見つめ
ていくことが大事だと改めて感じました。

野村先生のお話からは、働くということは
関係性なんだなと強く思いました。誰かが
入つた・抜けたことによって働きやすさ・働

——NPOの世界でも一生懸命やつている

人ほど、あの人はライフワークで好きでやつ
ているから忙しくてもいいんじゃない？み
たいな風潮はありますよね。でもそれは仕事
としてやつていて、お金をもらつてあるから
だというそこの冷静さも大事。逆に言うと、
お金をもらう対価分はきちっと仕事をするの
は当たり前の責任だと思います。

働き方の多様性とともに、個人の働くこと
への多様性が表明しにくいし、わかりにく
い、求められない社会のなかなという感
じがします。たとえばひきこもりの方だつた
らこの程度できたらいいかなといったよう
なイメージで言われてしまう。でも人それぞ
れ違うので、もつとやりたい人もいれば、同
じワークの量でも疲れる人はいるはずです。
ですからワークもライフももう少し個人に
紐づけて考えて語られるといいのかなと思
います。

野村　　先ほどお話をうかがつていて、働くこ
とつて結構地域性が出るのかなと思いま
した。地域によつて働くとか、働くことの意味
になります。

野村　　辻岡さんのプロジェクトは事業 자체に
すごく興味が湧きました。できると思つて社
会に出る、でも挫折して戻ってきてまた社会
に出る、そのように行きつ戻りつしながら少
しづつ進んでいけるというところが特に興味
深かったです。教師になろうと思つている学
生たちは絶対に知つておいてほしいところ
です。

辻岡　　お二人のお話は大変勉強になりました。中野先生のお話にあつたBCPの策定を
していく中で、今後国や自治体が制度
化するようなこともありますが、やはり人間関係はすぐ
く大事な部分で、それが働く環境を規定して
いること実感できたので、これは今後僕たちの
プロジェクトの方でも引き受けて、論点にし
ていただきたいなと思ったところです。

辻岡　　お二人のお話は大変勉強になりました。中野先生のお話にあつたBCPの策定を
していく中で、今後国や自治体が制度
化するようなこともありますが、やはり人間関係はすぐ
く大事な部分で、それが働く環境を規定して
いること実感できたので、これは今後僕たちの
プロジェクトの方でも引き受けて、論点にし
ていただきたいなと思ったところです。

野村さんのお話を聞いてみると、学校の先生が全然
対応してくれないとよく聞きます。それで学
校に行ってみると先生はもう仕事で手一杯
で、この上新たな対応はお願いできないとい
うこと何度も経験しています。先生本人だ
けでなく、生徒や親もみんな困っているけれ
ども手がつけられない現状がある。それに対
して、実際起きていることの検証をしてくだ
さつていて、それが私としてもすごくあり
がたいですし、今後どうなるか聞きたいなと
思いました。「働く」、面白いテーマでした。

に立ちたい。そういうふうに生きていきたい
と思つています。仕事だから一生懸命やるの
は当たり前のです。仕事だからこそやつて
いるんです。だからプライベートで自発的に
そのサービスを立ち上げるかといったら、や
りません。でもそれが理解されないのですね。
私がそう言うと、なんで怒つてるの？つと
意外そうな顔をされました。仕事ですよと
言つてることに、意外とドライなんですね
とか言われて。

中野　　マイノリティへの視線については地
域性が出るのかなと思います。うちの子ども
が10か月になったタイミングが4月だったの
で、一歳になつてないけれども保育園に入れ
る決断をしたところ、その保育園で私はすご
く働いているお母さんというイメージになつ
ていると感じました。0歳で預けて、出張で
ショットチャウイなくなつたり、遅くまで働い
たりするお母さんというのは珍しかったのか
もしれません。子どもが発熱したときに迎え
に行き、授業を急に休講にできないので、抱
えたまま講義をしたことありました。その
ときに、「さすがキャリアウーマンだね」とか
けられた言葉が褒め言葉には感じられないこ
ともありました。

ときどき、働くつて悪いことなのかな、た
くさん働く＝愛情が少ないということではな
いのになと思います。仕事をいつぱいしてい
るのはダメな人だ、子どもではなく他の人に
愛情を流しているという感じにとらえられて
しまつて辛かったです。だからワークライフ
バランスという言葉も罪な部分があるのでは
ないでしようか。100を分けるという考え方自体がもしかした
ではありません。

中野　　本当に両方100があつていいはずです。
100を分けるという考え方自体がもしかした
ではありません。では両方が100にならないじやないですか。本当は両方100があつていいはずです。
きにくさがガラツと変わることがあるという
お声は、僕たちのインタビューでもたくさん
耳にしました。辻岡さんの活動であれば誰が
サポートとしてつくかとか、どのような体
制で全体をまとめていくかといったところで
もあると思いますが、やはり人間関係はすぐ
く大事な部分で、それが働く環境を規定して
いること実感できたので、これは今後僕たちの
プロジェクトの方でも引き受けて、論点にし
ていただきたいなと思ったところです。

中野　　お二人のお話は大変勉強になりました。中野先生のお話にあつたBCPの策定を
していく中で、今後国や自治体が制度
化するようなこともありますが、やはり人間関係はすぐ
く大事な部分で、それが働く環境を規定して
いること実感できたので、これは今後僕たちの
プロジェクトの方でも引き受けて、論点にし
ていただきたいなと思ったところです。

野村さんのお話を聞いてみると、学校の先生が全然
対応してくれないとよく聞きます。それで学
校に行ってみると先生はもう仕事で手一杯
で、この上新たな対応はお願いできないとい
うこと何度も経験しています。先生本人だ
けでなく、生徒や親もみんな困っているけれ
ども手がつけられない現状がある。それに対
して、実際起きていることの検証をしてくだ
さつていて、それが私としてもすごくあり
がたいですし、今後どうなるか聞きたいなと
思いました。「働く」、面白いテーマでした。



共同執筆 ◎築瀬健一、尼野千絵、尼野三絵、馬崎慧
(NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝)

人と人の新たな繋がりが、これか らの自治を支えていく



り来場者に振舞った。夏の盆踊りの日には子
育て支援団体と協働で、未就学児向けに玩具
がたくさん入ったでつかい水を作りプレー
パークを開催した。子どもたちはみんな玩具
よりも水を溶かすことによって夢中だったが、その
中に盆踊りで使える飲食チケットを混ぜてい
たことで、遊んで帰るだけでなく地域の盆踊
りにも参加してもらうことができた。

また建築専門学校の学生たちが廃材を用
い、互いが協力して座らないと安定しない「不
安定ベンチ」を制作してくれた。それ以外に
も出店者さんたちによる餃子作りや革細工の
小物作りのワークショップなどなど、バラエ
ティに富んだ盛り沢山の内容が実施された。

これらの企画は毎月【いっちょかミーティ
ング】という会議のなかで練られていった。
地域にある古民家をつかつて開催し、みんな

で晩ご飯を食べながら飲みながら話しあつ
た。ビールの試飲会やBBQ、秋には七輪で
秋刀魚を焼いたり冬は鍋を囲んだりなど、企
画について話すことと同じくらい、何を食べ
るかが大事であり、みんなは仕事や学校終わ
りに寄つて会食を楽しんでいた。この会議の
場自体が「ゆる自治」に繋がる交流の場とし
て機能していた。

かんぱいマーケットやいっちょかミーティ
ングの周知や報告は、【ジッチーノ通信】とい
う広報誌を二月に1回作成し地域内に全戸配
布した。手に取つた人が身近に感じてもらえ
るよう、みんなに顔なじみがありそうな人と
して校区内小中学校の校長先生からヤクルト
の訪問販売員さんなどにも取材し記事にし
た。リレーコラムは、いっちょかミーティン
グの中で、あみだくじによつて選ばれた人に

半ば強制的に執筆を依頼し、たまたまその日
だけ地域に観察に来ていた人も選ばれ戸惑い
ながらも快く寄稿してくれた。そして紙面の
隙間には関わる人たちの顔写真をたくさん載
せたので、子どもたちは自分の顔を紙面から
見つけて喜んでいた。

多様なテーマを気軽に持ち込める枠組みを
作ることで「ゆる自治」を目指したが、特に
出店者たちはイベント以外にも地域拠点を
使って期間限定店舗を出店したり、能登の復
興支援として現地での炊き出しに一緒に行つ
たりなど、枠組みに留まらない展開を見せた。
こちらが企図していない場面で活動が発
展し、人と人とが新たに繋がつていく姿がこ
れからの自治を支える土壤になつていくか
もそれない。

「ゆる自治」は言い方が違うだけで、これま
でさまざまな人権課題に接続し多様な人たち
を包摂し発展してきた北芝のまちづくりの在
り方のいわば焼き直しである。ただそのよう
なまちづくりがアフターコロナ以降の地域自
治において一つの先駆的事例となり得るのか
とも思い、北芝にぜひ足を運んでほしい。

共有から育まれる未来

「研究助成×先端技術の中間報告会・合同ワークショップ
2025」開催報告

● 寺田 俊(プログラムオフィサー)

て い ま し た。

第1部では、初めての試みとなるポスター発表形式によるプロジェクトの中間報告発表を実施しました。

プロジェクトの背景や問題意識、JJIまでの成果だけでなく、試行錯誤のプロセスや悩みも含めて「現在地」を共有していただきとをねらいとしました。不安もありましたが、開始直後からポスターの前では助成対象者同士や有識者との活発な意見交換が自発的に始まり、会場の空調が追い付かないほどの盛り上がりでした。

参加者からは「共通の悩みが共有できた」、「助言や励ましを通じて仲間意識が芽生えた」といった声が寄せられ、交流の場として大きな成果が見られました。研究の進捗報告にとどまらず、今後のコラボレーションの可能性や、新たな実践のアイデアがその場で生まれてしていく場となりました。

トヨタ財団では助成事業の一環として、助成対象者同士の交流や研究成果を社会へ還元する機会づくりにも取り組んでいます。2025年10月18日、研究助成プログラムと特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」の合同で、中間報告会・ワークショップを開催し、これまでの助成対象者や有識者など約50名の参加者が集まりました。当日の会場には、分野や立場を超えて学び合い、新たな協働の芽を見出そうとする期待が広がりました。

域の異なる参加者の意見を丁寧に橋渡ししながら議論を深めました。

最初に中澤未美子氏(山形大学学術研究院)より、「社会のリソースとしての研究——『裏側』をみることの意味」と題し、大学や学校現場での臨床心理に携わる自身の経験を踏まえ、労働の場で生じる悩みや「ミユニークーションの困難が、個人だけの問題ではなく社会の構造と深く結びついている」と指摘しました。

また、論文や数値化された成果といった「メロンパンのカリカリした部分」だけではなく、そこに至るまでの迷いや葛藤、現場での対話の積み重ねといった「ふわふわの部分」こそ社会に開いていく必要があると述べ、研究の背景にあるプロセスや悩みといった“裏側”を開いていくことの意義を説かれました。これに対し、コメンテーターの平田未季氏(北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部)は、研究者が自身の経験や葛藤を言語化し、一般化すること自体が重要な社会還元になると述べました。

また、國吉康夫氏(先端技術選考委員長、東京大学大学院情報理工学系研究科)は、研究者が対象に深く関わりながらも倫理性を保つ「抵抗的実践」の科学的意義に触れ、研究者が現場の一員としてもがきながら、新しい方法論やオープンサイエンスの方を切り拓いていく重要性を指摘しました。

続いて、大澤博隆氏(慶應義塾大学理工学部)より、「人工知能と虚構の科学」、Aーによる未来社会の想像力拡張」と題し、SFプロ

第1部・中間報告会(ポスター発表)

トヨタ財団 YouTube
チャンネル
[www.youtube.com/c/
thetoyotafoundation](http://www.youtube.com/c/thetoyotafoundation)



参加者による記念撮影

トライピングを活用した研究実践を紹介しました。SFが持つフィクションとしての力を応用し、企業や自治体、市民とともに「少し先の未来」の物語を描くことで、従来の延長線上にはない価値観の転換や、新しい未来像の創出を促すこと、またフィクションを媒介することで立場の違いを超えて対話しやすくなる点を示しました。

これに対し、コメンテーターの赤坂文弥氏(国立研究開発法人産業技術総合研究所)は、SFには「思考の枠を外す力」があり、あえて現実離れした未来像を描くことで、多様な人々が新しい視点を生むと評価しました。

研究成果を論文として発表するだけではなく、その背景にあるプロセスや葛藤を「開く」ことや、対話を続けることの重要性とその是非について、活発な意見交換がなされました。

第2部では、「学術性を保ちながら、どのように研究は社会とのつながり、研究成果を社会に還元していくのか」という問い合わせを掲げ、助成対象者2名による話題提供と、コメンテーターからの「メント、フロアを交えたディスカッションを行いました。

司会は、佐倉統氏(研究助成選考委員長、実践女子大学人間社会学部)が務め、専門領域

懇親会の様子



第2部：ワークショップ



第1部：中間報告会



した。また、ワークショップは、前半の「アート(ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞)」と後半の「SFプロトタイプ」の2つのパートで構成されました。

まず前半では、福武財団エデュケーターのファシリテーションでアート作品を鑑賞し、アート作品を通して浮かぶ言葉を各自グループに入力していきました。私たちのグループは、最初にヤニス・クネリスの「無題」(1996年)を観賞したのですが、驚いたことに、その作品から得る印象が見事にみんなバラバラでした。食べ物を連想する人がいれば、薪割りを想起する人、さらには人生を思い浮かべる人もいました。多様性とはこうした「隠れたところ」にも常に存在しているのだ、改めて実感しました。

私は「壁の断面」にも見えると思ったのですが、それをエデュケーターに伝えると「何の壁ですか?」との問い合わせがきました。「家かな……」と答えると、そこから次々と問い合わせが続きます。「どんな家ですか?」「人は住んでいますか?」「どんな人が住んでいますか?」「家で使っていたモノは含まれていますか?」「それはどんな時に使っていますか?」「どんな経緯で壁の断面に入れたのですか?」などなど。そして、不思議なことに、エデュケーターの問い合わせているうちに、単なる「壁の断面」と思っていたものから、ある家族の物語が立ち上がりつづくようでした。「ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞」によって膨らむ想像に、これまで非常にもつたない芸術鑑賞をしていたかもしれない

した。また、「SFプロトタイプ」は、前半の「アート(ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞)」と後半の「SFプロトタイプ」の2つのパートで構成されました。

まず前半では、福武財団エデュケーターのファシリテーションでアート作品を鑑賞し、アート作品を通して浮かぶ言葉を各自グループに入力していきました。私たちのグループは、最初にヤニス・クネリスの「無題」(1996年)を観賞したのですが、驚いたことに、その作品から得る印象が見事にみんなバラバラでした。食べ物を連想する人がいれば、薪割りを想起する人、さらには人生を思い浮かべる人もいました。多様性とはこうした「隠れたところ」にも常に存在しているのだ、改めて実感しました。

私は「壁の断面」にも見えると思ったのですが、それをエデュケーターに伝えると「何の壁ですか?」との問い合わせがきました。「家かな……」と答えると、そこから次々と問い合わせが続きます。「どんな家ですか?」「人は住んでいますか?」「どんな人が住んでいますか?」「家で使っていたモノは含まれていますか?」「それはどんな時に使っていますか?」「どんな経緯で壁の断面に入れたのですか?」などなど。そして、不思議なことに、エデュケーターの問い合わせているうちに、単なる「壁の断面」と思っていたものから、ある家族の物語が立ち上がりつづくようでした。「ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞」によって膨らむ想像に、これまで非常にもつたない芸術鑑賞をしていたかもしれない

した。また、「SFプロトタイプ」という言葉を「存知でしょうか。未来をサイエンス・フィクションとして描き、その実現に向けてバックキャティング的に物語を組み立てていく(プロトタイプしてゆく)手法で、SFという自由で創造力に富んだ方法を用いてイノベーションを生み出そうとするアプローチとして注目されています。実際、さまざまな企業が新しい製品やサービスの開発に向けて、SFプロトタイプを取り入れつつあるそうです。

特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」
ワークショップ・レポート

想像力で未来をひらく

「アート×SF×AIによる地域未来共創ワークショップ秋バージョン」に参加して

◎ 寺崎陽子(プログラムオフィサー)

今回私がお邪魔したのは、そうした未来を構想する「SFプロトタイプ」という手法にAーを掛け合わせた研究プロジェクト——「人工知能と虚構の科学・Aーによる未来社会の想像力拡張」(2023年度先端技術と共創する新たな人間社会、代表・大澤博隆)——による実験的なワークショップです。「アート×SF×Aーによる地域未来共創ワークショップ」というタイトルのもと「瀬戸内のアートな島の20年後の未来を考える」をテーマに掲げていました。

「アート×SF×Aー」で未来を想像するとはどのような展開になるのか期待が高まりますが、この研究プロジェクトは生成Aーによる創作活動への影響が飛躍的に強まるなかで「虚構の科学」を提唱し、フィクションとAーの可能性を探るなかで人とAーとが共創する未来について議論しています。その試みについて、ワークショップへの参加報告から少し紹介できればと思います。

2025年11月2日フェリーに乗つてワークショップ会場である「ベネッセハウスミュージアム」に向きました。海外からの観光客も多く、世界から注目される小さな島の熱気を肌で感じることとなりました。さて、ミュージアムで行われたワークショップでは、参加者が6名ずつ2つのグループに分かれ、まずは軽い自己紹介から始まりました。会社員や大学院生、島の住民の方など多様なバックグラウンドの方々が集まっています。

ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞

後半では、研究者のガイドのもとグループでSFプロトタイプに挑戦しました。チームは先ほども述べた通り、「瀬戸内のアートな島の20年後の未来」です。前半でアート作品を通して紡ぎ出したさまざまな言葉を組み合わせながら、瀬戸内の島の未来について想像を膨らませます。しかし、これが意外にも難しく感じられました。SFだからこそ許される自由な発想をしたいと思っても、頭が固くなってしまっているのか、既存の枠組みから外れた言葉選びやストーリー展開になかなか結びつきません。そんなとき、現在の私たちはAーがあります。ただし、それはAーに頼るということではないと感じました。なぜなら、今回の実験的なワークショップでの体験が非常に豊かな思考実践に感じられたからです。技術は人の能力を引き出してくれるものもあると思います。それはAーを用いた創造性においても言えることではないでしょうか。参加者たちでSFのプロトタイプを作ることは困難に感じられましたが、楽しい作業でもありました。Aーはその楽しさを倍増させるツールとして、私たちに想像を広げるヒントをくれるもののように思いました。

Aーと人とが「共創」するとはどういうことなのか——SFとAーによって創造性が拡張していくことを体験し、困難な時代を切り開くイノベーションの可能性を少し垣間見たような気がしました。



参加者による記念撮影



参加者による記念撮影



ワークショップの風景



ぐるぐる



直島の風景

と、「人間と人工主体の共存のあるべき姿」をテーマにした学際的なプロジェクトを開始しました。プロジェクトの狙いは、今後の人工知能(AI)技術の発展を見すえて、人工物が「主体」となる可能性と、そこから生じる社会的・倫理的な課題を予見的に検討することでした。しかし、技術の進歩の速度は、私たちの予想の遙か上を行きました。

プロジェクト開始から数か月後の夏、テキストから精緻な画像を生成するAIが次々と現れ、同年11月にはChatGPTが登場。そこから数年でAIは日常生活のいたるところで用いられるようになり、人間社会とAI技術の関係は一変しました。それに伴い——これはプロジェクトで想定した通りでしたが——ある哲学的な問い合わせが世間の注目を集めようになりました。「AIはいつか人間のように心を持つのか」という問い合わせです。

かつてはSFの世界にあつたこの問い合わせ、今や現実的な可能性として語られるようになります。多くの人がこの哲学的な問い合わせに関心を寄せたようになつた状況を、私は哲学研究者として嬉しく思つて、一抹のいらだちにも似た歯痒さも覚えていました。「心とは何か」という根本的な問題について十分な省察がなされないまま、世の中ではSF的な未来への期待と不安ばかりが先走りして、いるように感じられたからです。

なぜ「AIはいつか心を持つ」と期待されるのでしょうか。その裏側には、「人間の心は脳というハードウェアで動くソフトウェア(コン

越えるのを防ぐために体を投げ出すのでしょうか。単に「白線を越えたら相手ボールになる」と頭で理解しているからではありません。日々、その競技を鍛錬してきた結果、白線はもはや考えるまでもなく特別な「境界線」に感じられ、選手の身体を突き動かすのです。学生時代、ラグビーという競技に打ち込んでいた私は、頭での理解とは異なる身体的な「知」の経験を見事に言語化した、メルロ＝ポンティのこの分析に衝撃を受けました。これを学ばずに大学を出るわけにはいかないと大学院に進学しました。

その後、このメルロ＝ポンティの思想を認知科学の領域に融合する「エナクティヴィズム」という考え方出会い、今でもそれをテーマに研究を続けています。エナクティヴィズムの視点は、身体と世界の交流から心が作り出されるありますを解き明かします。たとえば、かけがえのない身体があるからこそ、私たちは「食べ物」や「寝床」の意味を経験できる。さらに、他者との関わりの中で形成される社会的な身体をもつからこそ、生命維持に必要なものだけでなく、人間社会が作り出した「白線」や「言葉」にさえ、深い意味が感じられるのだ、と。

メルロ＝ポンティやエナクティヴィズムの視点から捉えると、AIは自動車の運転、アートの制作、流暢な会話など、従来は人間にしかできないなかつたさまざまな活動をこなせるようになります。AI制御システムにロボットのボディを与えたり、大規模言語モデルに身体に関する膨大な知識を習得させたりする

「私のまなざし

44

身体性から見る 人間とAIの相違点

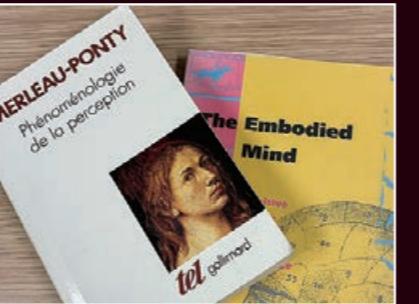
写真・文 ○宮原克典
北海道大学



2025年10月、サイエンス・カフェ札幌「AI時代、どううしたい?『人とモノの狭間のなにか』を哲学する」に登壇



2025年3月、人工主体の哲学・倫理学の第一人者David Gunkel教授と、LOVOT MUSEUM(東京都中央区)を訪問



メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』とヴァレラ、トンプソン、ロッシュ『身体化された心』



2022年8月にStable diffusion(テキストから画像を生成するAI)を使って、自分の名前(Katsunori Miyahara)をプロンプトに生成した画像

●宮原克典(みやはら・かつのり)
2021年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」
助成対象者。助成題目「人間と人工主体の共存のあるべき姿
を学際的に問うための新たな枠組み『人工主体学』の構築」に
けて」

ことはできるでしょう。しかし、それはかけがえのない生きた身体をもつことと同じではありません。将来、生きた身体を人工的に作り出せるようになる可能性はあるにしても、現在のAIシステムには、世界の生きた意味を経験するための根本的な基盤が欠けています。

たとえば、なぜ球技の選手はボールが白線を越えるのを防ぐために体を投げ出すのでしょうか。単に「白線を越えたら相手ボールになる」と頭で理解しているからではありません。日々、その競技を鍛錬してきた結果、白線はもはや考えるまでもなく特別な「境界線」に感じられ、選手の身体を突き動かすのです。学生時代、ラグビーという競技に打ち込んでいた私は、頭での理解とは異なる身体的な「知」の経験を見事に言語化した、メルロ＝ポンティのこの分析に衝撃を受けました。これを学ばずに大学を出るわけにはいかないと大学院に進学しました。

その後、このメルロ＝ポンティの思想を認知科学の領域に融合する「エナクティヴィズム」という考え方出会い、今でもそれをテーマに研究を続けています。エナクティヴィズムの視点は、身体と世界の交流から心が作り出されるありますを解き明かします。たとえば、かけがえのない身体があるからこそ、私たちは「食べ物」や「寝床」の意味を経験できる。さらに、他者との関わりの中で形成される社会的な身体をもつからこそ、生命維持に必要なものだけでなく、人間社会が作り出した「白線」や「言葉」にさえ、深い意味が感じられるのだ、と。

メルロ＝ポンティやエナクティヴィズムの視点から捉えると、AIは自動車の運転、アートの制作、流暢な会話など、従来は人間にしかできないなかつたさまざまな活動をこなせるようになります。AI制御システムにロボットのボディを与えたり、大規模言語モデルに身体に関する膨大な知識を習得させたりする

ことはできるでしょう。しかし、それはかけがえのない生きた身体をもつことと同じではありません。将来、生きた身体を人工的に作り出せるようになる可能性はあるにしても、現在のAIシステムには、世界の生きた意味を経験するための根本的な基盤が欠けています。

たとえば、なぜ球技の選手はボールが白線を越えるのを防ぐために体を投げ出すのでしょうか。単に「白線を越えたら相手ボールになる」と頭で理解しているからではありません。日々、その競技を鍛錬してきた結果、白線はもはや考えるまでもなく特別な「境界線」に感じられ、選手の身体を突き動かすのです。学生時代、ラグビーという競技に打ち込んでいた私は、頭での理解とは異なる身体的な「知」の経験を見事に言語化した、メルロ＝ポンティのこの分析に衝撃を受けました。これを学ばずに大学を出るわけにはいかないと大学院に進学しました。

その後、このメルロ＝ポンティの思想を認知科学の領域に融合する「エナクティヴィズム」という考え方出会い、今でもそれをテーマに研究を続けています。エナクティヴィズムの視点は、身体と世界の交流から心が作り出されるありますを解き明かします。たとえば、かけがえのない身体があるからこそ、私たちは「食べ物」や「寝床」の意味を経験できる。さらに、他者との関わりの中で形成される社会的な身体をもつからこそ、生命維持に必要なものだけでなく、人間社会が作り出した「白線」や「言葉」にさえ、深い意味が感じられるのだ、と。

メルロ＝ポンティやエナクティヴィズムの視点から捉えると、AIは自動車の運転、アートの制作、流暢な会話など、従来は人間にしかできないなかつたさまざまな活動をこなせるようになります。AI制御システムにロボットのボディを与えたり、大規模言語モデルに身体に関する膨大な知識を習得させたりする

可能性は無限大です。ロボットに心を宿させることが潜んでいます。実際、そうでなければ、AIに心を宿することは、単に技術的に困難なだけではなく、そもそもの可能性としてあります。このように心をコンピュータに宿すことで、自分の心をコンピュータにアップロードすることも、原理的には可能だということになります。思考や感情といった捉えどころのない現象が、実はプログラムにしたがつた情報処理でしかないという「眞実」には、全ての悩みを吹き飛ばしてくれるような魅力すらあります。しかし、本当に人間の心はコンピュータプログラムなのでしょうか。たまたま人間におりては脳で動くけれども、原理的には半導体集積回路にも実装できるような現象なのでしょうか。

この見方が正しいとすると、そこから広がる可能性は無限大です。ロボットに心を宿させることが潜んでいます。実際、そうでなければ、AIを含む認知科学の発展を20世紀半ばの黎明期から現在に至るまで支えてきました。

え方が潜んでいます。実際、そうでなければ、AIに心を宿することは、単に技術的に困難なだけではなく、そもそもの可能性としてあります。このように心をコンピュータに宿すことで、自分の心をコンピュータにアップロードすることも、原理的には可能だということになります。思考や感情といった捉えどころのない現象が、実はプログラムにしたがつた情報処理でしかないという「眞実」には、全ての悩みを吹き飛ばしてくれるような魅力すらあります。しかし、本当に人間の心はコンピュータプログラムなのでしょうか。たまたま人間におりては脳で動くけれども、原理的には半導体集積回路にも実装できるような現象なのでしょうか。

この見方が正しいとすると、そこから広がる可能性は無限大です。ロボットに心を宿させることが潜んでいます。実際、そうでなければ、AIを含む認知科学の発展を20世紀半ばの黎明期から現在に至るまで支えてきました。



REPORT

カイケツ Next【入門編】
in 北海道

2016年度に開始した「トヨタNPOカレッジ『カイケツ』」は、NPOを対象に「代表者に仕事が集中する」「業務効率が悪い」など、事業実施や組織運営において発生する問題を解決していく力を身に付けていくために、トヨタ自動車(株)で長年にわたり取り組まれてきている「問題解決手法」を学ぶ連続講座として6期にわたり実施してきました。

的に考える機会となりました。

当日は助成対象者をはじめ、企業、大学、公的機関、NGO等で実務や研究に携わる50名以上が参加し、温かい雰囲気の中にも活発な議論が交わされました。

基調講演では、選考委員長を務めてこられた園田茂人先生より、選考を通じて見えてきた日本社会の課題についてお話し下さいました。前半の事例発表では、多文化を生かす地域づくり、情報アクセス格差の是正、健康支援体制の整備など、多様なテーマが紹介されました。それぞれ限られた時間でのご報告となりましたが、質疑応答では幅広い視点から意見が寄せられ、「子ども」「日本語」「人権」など個別の論点にとどまらず、外国人をめぐる社会全体を見渡す視座の重要性があらためて共有されました。

後半は、高度人材の国内定着、日本企業の海外事業から得られる学び、東南アジアにおける移住経験共の取り組みなど、国際的な視野を踏まえた報告が続きました。いずれの発表からも、現場の知見と研究の成果を行き来しながら課題に向き合うことの大切さが浮き彫りになりました。

了後には懇親会、翌日午前には助成プロジェクトメンバー限定の情報交換会も開催しました。本助成プログラムでは、研究と実践のあいだに存在する情報・経験のギャップを埋め、双方の学びを深めていくことも目指しています。今回の集まりが、参加者のみなさまの実践や研究をさらに豊かにするきっかけとなれば幸いです。

終



PUBLICATIONS

INFORMATION

JOINT(ジョイント)50号発行!

本誌、広報誌「JOINT」は、トヨタ財団の活動や考え方をより多くの方々にお伝えすることを目的として年3回発行し、2009年7月の創刊号以来、約17年をかけて今号で50号の発行に至りました。

リーマン・ショック直後からはじまり、公益法人制度改革とともになうトヨタ財団の公益法人化、東日本大震災をはじめとする自然災害の多発、新型コロナウイルスの感染症の世界的大流行などさまざまな社会変化がありました。そうした中で助成対象者のみなさまの活動は、これまで以上に社会を支える礎としてなくてはならないものとなりました。JOINTでは今後もそのような助成対象者のみなさまの活動を紹介しつつ、広報活動を通じてよりよい社会の一助となるべく務めてまいります。

移動する子どもたちのことばの教育——多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来

● 出版社：明石書店

● 著者名：田中雅子・坂本光代編著



ました。一方で、経年により受講団体の組織像やニーズの変化などが徐々に生じ、同時に事務局側にも新たな問題意識が芽生えてきたことから、7期目の実施は見送り、2023年度に今後に向けた検証の機会を設けました。そして、その結果を踏まえて、2025年度より「カイケツ Next」としてリニューアルし、大きく以下の2点の改変を行いました。

①「中間支援組織」を対象に実施

②【入門編】と【アドバンス編】の2つのコース体系に変更

※2つのコースの具体的な紹介や開催レポートなどはトヨタ財団のウェブサイトをご参照ください(今年度内に公開予定)。

今回は、2025年11月28日(土)、29日(日)に北海道で開催した【入門編】の様子を簡単に紹介したいと思います。従来の「カイケツ」は「問題解決手法」の8ステップを約半年間かけて座学での学びと自団体に持ち帰つての実践という連続講座で実施していました。

【入門編】は2日間の開催として、初日に「問題解決」の考え方や本質を主眼において全体講義と「分析手法」に関する演習を行いました。JOINT(ジョイント)50号発行!

2025年11月19日(水)午後、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」に関する招待制シンポジウムを野村コンファレンスプラザ新宿にて開催しました。本助成プロジェクトは2019年度の開始以来、約40のプロジェクトを支援しており、今回のシンポジウムでは、その成果を振り返りつつ、今後の日本社会における外国人受け入れの姿を多角



招待制シンポジウム「外国人材の受け入れと日本社会の変化」を開催しました

い、2日目は「テーマ選定」の演習と締め括りとして各参加者から発表をいただきました。参加者の皆さんほぼ全員が初見となり、ため負荷も大きかったと思いますが、講師への質疑や演習でのディスカッションなどからは非常に熱量や意欲の高さが窺えました。

今年度の【入門編】は2月に東京開催も予定しておりますので、ご関心ある中間支援の方々のご参加を心よりお待ちしています。

また限られた時間内で膨大な情報量でもあります。

たため負荷も大きかったと思いますが、講師への質疑や演習でのディスカッションなどから非常に熱量や意欲の高さが窺えました。

たため負荷も大きかったと思いますが、講師への質疑や演習でのディスカッションなどから非常に熱量や意欲の高さが窺えました。



On The Journey

— 旅の途上で —

2025年8月、助成プロジェクトメンバーとしてインド・ニルギリ丘陵を訪問。旅を振り返りながら、除去された外来種の木で作られた野生動物の

● いよいよ2026年が始まりました。今年は、サッカーフリークの私にとってとても重要な年。そうです、4年に一度のサッカーW杯イヤーです。日本代表は目標のベスト8を達成できるのか、今からドキドキ、ワクワクが止まりません。

私がサッカーを始めたのは高校生の時で、その時は、こんなにサッカーにのめりこみ、自分の人生に影響を与えるものになるとは思ってもいませんでした。そもそもサッカー部に入ったのも仲の良い友人に引っ張り込まれたからで、「好き」というほどでもありませんでしたが、そこである「一との出会いをきっかけに私はサッカーの魅力に憑りつかれます。その方の練習はとても厳しいものでしたが、サッカーを語るときは本当に楽しそうな顔をする方で、「もっとサッカーを楽しめ!」が口癖でした。ですが、教えていただいたのはサッカーの楽しさだけではありません。

その方に言われたことで今でも心に残っているのが「苦しい時に、苦しい顔をするな!」という言葉です。試合中、リードされて苦しい時に苦しむ顔をしていると、どんどん苦しくなる、そういう時こそ前を向け、ということで社会人になつて仕事がしんどい時は「つまむ」の言葉を思い出していました。わざと、「」のマークにやられた夏

いただいた「TAKA」は馬だけではなくライオンもあります。[Y.N.]

[編集後記]
EDITOR'S NOTE

合宿の練習以上に苦しい経験をその後の人生ですることはありませんでしたが……。ということで、今年の6月、いよいよ至福の時がやってきます。毎日仕事をつちのけで試合観戦に夢中になっているかもしれません、その時は、財団の皆様、なにとぞご容赦を。[N.K.]



● ● ● 気がつけば50号田という感覚ですが、創刊が2009年ですから、ほぼ17年近くの月日が経過したことになりますが、この間の人々の生活及び社会の激しい変動ぶりには驚くべきものがあります。いうまでもなく、トヨタ財団そして広報誌としての本誌もその社会の変化と無縁ではありません。形態が大きく変わることなくとも、そのコントラント(中身)は社会の動きに対応して変えるべきは変えるのが、変えてはならないその目的を堅持するためには必要です。

変えてはならない目的とは、財団の設立主旨にある「人間のより一層の幸福をめざす」という一言に尽きるでしょう。哲学者アリストテレスは幸福とは「善く生きる」ことだと言っていますが、このデジタル・テクノロジーの時代に、たとえばA-

判当時はスマートフォンが一般的ではなかったことを思うと、単に時間の流れだけでなく社会自体の変化の速さにも驚きます。本誌に登場される方々は、そういった社会の変化のさらに先を見据えて活動されており、毎号々々制作しながら多くのことを学ばせていただいている。[K.S.]

● ● ● おかげさまで本誌JOINTが50号を迎えるました。私はプログラム部から異動になり広報を担当することになりましたが、プログラム部時代の知識が役立つこともあって両方経験できることがありがたく感じています。本年は助成対象者の皆様にこれまで以上に協力して新しく新しい試みをしていきたいと考えています。[Y.N.]



FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT [ジョイント] No.50

発行日 2026年1月27日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437 東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

